

水俣学関連資料管理・活用の現状と課題

花田, 昌宣 / Hanada, Masanori

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

673

(開始ページ / Start Page)

10

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

2014-11-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010566>

水俣学関連資料管理・活用の 現状と課題

花田 昌宣*



私どもの研究機関は水俣学研究センターと申しますが、水俣病にかかわるさまざまな調査研究を進めるとともに関連する資料を広く収集し、公開しています。本日はこの資料の話をさせていただくわけですが、まず最初にこの水俣学という、東京では聞き慣れない私どもの試みについて少しお話しさせていただきたいと思います。

水俣学と資料の整理・公開

私自身は、水俣病の問題には学生のころからかかわって、もう40年近くになります。専攻は、もともとは経済学で労働経済学の研究を長くしていました。ただ、皆さま方も名前をご存じかと思いますが、原田正純先生という水俣病のことを長くやっていらっしゃる先生を私の勤務校である熊本学園大学にお迎えし、それから水俣学をつくろうということで調査研究を進めて参りました。その一環として資料を集めて公開することも位置づけられております。



熊本学園大学水俣学現地研究センター（水俣市）

この水俣学ですが、「人類の負の遺産としての公害、水俣病を将来に生かす」を掲げて2000年に研究プロジェクトをまず立ち上げ、2005年には水俣学研究センターを設置してきました。その中でプロジェクトを大きく三つに分け、その一つを資料の収集、公開、発信というように位置づけています。

水俣と言ってもどこにあるか直観的にはお分かりにならないかもしれませんが、九州は熊本県の南部です。鹿児島県との県境に水俣市があり、そこに私どもは、2階建ての小さな建物を水俣市役所からお借りして現地研究センターをおいています。大学のキャンパスは熊本市内にあるのですが、その一角に、研究センター、事務局、資料庫等々を置いています。熊本県の地方私学で比較的自由にやらせてもらっています。

今日のテーマは水俣学とは何かということではありませんが、簡単に紹介しておきます。水俣病

*花田昌宣（はなだ・まさのり）熊本学園大学・水俣学研究センター・センター長

は皆さんご存じの公害事件です。今年で発生が確認されてから57年経過しています。それにもかかわらず今なお問題は残っているし、東京で報道を目にすることは年に数回程度かと思いますが、現在でも裁判などの患者さんの運動があったり、加害企業チッソの分社化、認定基準の改悪等、いろいろなことが起きています。

発生当初、熊本の地方都市で東京の人たちには、どこにあるかもよく分からないところで起きた公害事件でした。水俣を「みなまた」と読める人は少なく、みずまたと言われていたそうです。この水俣病ですが、初期の患者さんたちは、症状があまりにも深刻だったので報道を通して全国に衝撃を与えたのですが、患者数は100人足らずと言われていました。現在では少なくとも10万人ぐらいいるのではないかと推計されています。そうした半世紀を超える経験の中から、水俣病の失敗とはいったい何だったのかということを学んでいきたい、調べていきたい、そして発信したいというのが私どもの出発点です。

提唱者の原田正純先生は、もともとはお医者さんですが、医学の限界を超えてさまざまな学問分野の人たちと一緒に学を興したいという意志をもって始めました。名前を何とつけるかということで、田中正造の谷中学、あるいは伊波普猷の沖縄学など、いろいろな「学」があるのですが、それに着想を得て、水俣学というように呼びました。

熊本と水俣は100キロぐらいしか離れておらず、いまは新幹線で30分弱で行けますので、地の利、人の利を活かして、地域に内在した調査・研究ができるということをモットーとしています。

研究活動の柱として三つ掲げています。一つは第一プロジェクトで「水俣病被害の全容解明」です。基本的には水俣病多発地域、とくに漁村に入り、患者さんと会い、さらに資料とつきあわせながら、いま水俣で起きている問題が何かを解明していく。ここにはお医者さんたちや社会学者と一緒に現地に入って調査しています。

二点目は、今の水俣や地域社会をどうしていくかということで、第二プロジェクト「地域再構築モデルの構築」をにかけています。地域の人たちとこれからの水俣、あるいはこの地域をどうしようかということを検討している研究班です。そしてこの二つをカバーするのですが、第三プロジェクトという形で「水俣学関連資料のデータベース化・発信」を進めています。

この第三プロジェクトは、外から見ると地道で、派手さはないのですが、一定の成果を上げていきます。そのことを今日お話しします。

私どもが蒐集整理している水俣病にかかわるさまざまな資料は、同時代資料、現代の資料であって、古文書ではありません。私自身はもともとユーザーでしかなかったわけですが、このような資料が散逸するのではなく、またどこかに退蔵されるのではなく、多くの人々に活用していただけるよう、使えるようなものにしていきたい。これが私たちの思いです。

また、田中正造が谷中学と名付けた足尾鉍毒事件の研究は100年たった今でも続いているわけで、水俣病の研究もまた100年ぐらいは最低続くと考えれば、その資料をきちんと集めて残しておくことは必要だろう。このように考えているところです。とはいえ、私どもの研究機関にはアーキビスト、プロはおりません。むしろアーキビストを置いている研究機関はとても少ないのではないのでしょうか。そうした状況の中でできることを考えております。

水俣病関連資料の所蔵状況

水俣病の関連資料は、いろいろなところに散らばっていますので、どこに、どれくらいあるのかということを紹介しておこうと思います。

いちばん有名でまとめて所蔵していると思われるのは、水俣市にある一般社団法人で、水俣病の患者さんたちの闘いの成果を受け、水俣病患者を支援する人たちの浄財を集めて設立された水俣病センター相思社です。ここには水俣病の第一次訴訟と言われる40年前の裁判の資料や訴訟過程で蒐集された資料を中心として、いろいろなところから寄せられている資料があります。ホームページ上で目録にアクセスできるようになっており、10万点ぐらいあると言っていますが、何ををもって10万点と数えたかはよくわかりません。ここは研究機関ではなくアーキビストもいませんので、心配なところはあります。

2番目に水俣市立水俣病資料館があります。ここは資料館ではなく展示館ですが、ここ4～5年、新聞記事をはじめとして書籍類を蒐集し、近年は行政資料を集めるようになっていきます。とりわけ、水俣市が持っていた行政資料がこちらに移管されています。まだ目録化はされていないのですが、今後充実することを期待したいと思います。

あと、新潟水俣病資料館は新潟県の機関ですが、新潟水俣病訴訟の資料を中心に集めています。ここも目録化はできておりません。4番目は少し毛色が変わったところで、チッソの企業史を研究していた矢作正先生という方が、御自身の集めた資料をさらに加えて個人資料館をつくっています。5番目は宇井純のコレクションで、埼玉大学におかれていたものが、いま立教大学共生社会研究センターに移管され、水俣病関連の資料もかなり含まれています。6番目は環境社会学者で、水俣病についても研究しておられた飯島伸子文庫で、静岡の富士常葉大学に所蔵されています。ついで、熊本大学ですが、図書館に学術資料調査研究推進室を置いています。丸山定巳先生や富樫貞夫先生が退職された後は専任の現役研究者で水俣病の研究をされている方がおられないようです。

現地に密着した水俣学研究センターの活動の特徴

私どもの研究センターについて触れておきます。

私どもは水俣学研究プロジェクトを2000年に立ち上げました。それまでに私どもの大学にはいくつもの水俣病関連の資料がすでにありました。弁護士から寄贈された資料、あるいは退職した教員が持っていたコレクションなどが少しあり、その整理をし始めたところ、水俣病を引き起こしたチッソの中の新日本窒素労働組合が持っている資料を引き取ってくれないかという話が持ち上がりました。

この労働組合は1962年に分裂して、第一組合、第二組合と分かれるわけですが、その中の主流の第一組合の最後の組合員が2005年に退職し組合組織は解散することになりました。その組合事務所には、膨大な資料があり、何とかしたいとの相談がありました。敷地100坪の事務所の中に未整理なままの資料が膨大にあり、少しずつ調査をしていたところ、本学のほうで受け取るということで契約を結びました。

それが私どものアーカイブをつくっていかうという根本的な出発点であります。そして、私どもが2005年に水俣学研究センターを組織として立ち上げ、水俣市内に現地研究センターを開設し、

そこに資料を移して本格的な体制をつくってデータベース化する取り組みを始めていきました。

先ほども申しましたように、水俣病に関する資料を所蔵している機関は、先ほども私どもも含めて9ヶ所ほど挙げましたが、これ以外にもいろいろなところに分散して資料があります。私どもは改めて何をしようかと議論しました。私どもが現地で調査を重ねていくうちに、いくつかの資料が集まってきます。それを大学として引き受けるのか、あるいはNPOの形で別の資料館をつくるのかということで悩みました。しかし、とりあえず大学という組織の中の研究機関に置いておけば廃棄されることはないであろうと考え、大学に置こうと決断しました。そうである以上、使えるような形にしていきたいというのが私どもの思いです。

私どもが所蔵し整理している資料を簡単に紹介しますと、新日本窒素労働組合の資料が、簿冊単位で6,225点、写真が6万点あまり、物品資料が300点近くあります。これらは整理・入力を終え、水俣学研究センターのホームページ上でデータベースにアクセスできるようにしてあります。今はこれに関しては簿冊の中の一紙ごとの入力をすすめて、さらに使いやすくできるように進めています。

次に、12月に公開する資料として、水俣病研究会という水俣病訴訟を支えた研究者たちの在野の研究会が有していた資料です。点数にして10万点を超える資料、ファイル、簿冊の数にして3,000～4,000ぐらいあるのですが、その目録化した部分の文書の画像データを公開する。これは水俣病研究のコアになる資料です（2013年12月にデータベースを公開しました）。

それから、水俣病に長くかかわっていたジャーナリスト、40年間にわたり水俣病の患者さんを支援してきた宮澤信雄という方が亡くなられて、遺族から段ボール箱にして40箱を超える資料が寄贈されています。半年ほどかかって整理して、この12月に目録をアップいたします。ご遺族のもとにはまだ資料が残されていますので継続的に受け入れているところです。

もう一つは皆さん方も名前をお聞きになったことがあるかと思いますが、最首悟さんの資料です。色川大吉さんたちと不知火海総合学術調査団に加わって水俣の調査をなさっています。そのときに漁民資料をずいぶん集めておられ、私どもで受け入れることができました。葦北漁民資料を中心に段ボール箱で30箱程度ありましたが、最首悟旧蔵資料として、これも簿冊、ファイルごとに入力が終わりました（2013年12月にデータベースを公開しました）。

いまだ公開できていないものがいくつもあります。一番大きなものは松本勉資料と呼んでいます。これは水俣市の職員だった方の旧蔵資料・書籍類で、みかんのコンテナで60数ケースありました。この方が1960年代の初めごろの初期からの水俣病患者の資料を持っておられまして、亡くなられた後、ご遺族から私どものほうに寄贈していただきました。患者さんの聞き取りの録音テープが膨大に含まれており、きわめて貴重な資料です。水俣病患者の浜元二徳さん、支援団体の資料群があり、順に整理入力して公開しております。さらに、2012年に亡くなった原田正純氏の資料があるのですが、お医者さんなので患者のカルテや映像がたくさんあり、整理は進めていますが公開はいま躊躇しているところです。

加えて先ほどの話にもありましたが、水俣病事件は現在進行形で、今もいくつもの裁判が起こされており、その訴訟資料が寄せられています。40年にわたる中で水俣病の訴訟は20件以上起きているのですが、主だったものの資料が私どもにきています。訴訟資料は公害事件や薬害事件では極

めて貴重です。準備書面だけではなく、法廷に提出される証拠類です。日ごろ表に出ることのない企業・行政資料等々が膨大に含まれています。そういう意味で貴重な資料を私どものところに置いています。

それから、私も自身は水俣市内、現地に足を置いているので、さまざまな方が資料を持ってこられ、寄贈を受けます。患者さんたちを支援していた水俣教組、あるいは地区労の資料、未整理なままですが、組合事務所のあったビルが解体されるというところで寄贈を受け、とりあえず段ボール箱と言っていますが、みかんのコンテナに入れているのですが、段ボール箱にするこの倍の100箱ぐらいにはなる。こういった一連の資料群が私どもにはあり、順番に入力して公開しようとしています。

資料の公開と活用のために

具体的には私どものデータベースをみていただきたいと思います。水俣学研究センターのホームページに行ってください、そこで「データベース検索」というアイコンをクリックしてください。所蔵資料として「新日本窒素労働組合旧蔵資料」がメインですが、水俣病をはじめとして水俣病関係の資料がどんどんアップされています。



新日本窒素労働組合旧蔵資料

「新日本窒素労働組合旧蔵資料」では、写真や動画映像も掲載しています。組合資料の中に約6万枚写真が残っているのですが、今その写真を順番に整理しています。写真整理というのは文書の整理と違い、撮影日時、場所、被写体の人物などを確定していく作業が重要だと私どもは思っています。現在、70～80歳代になる元の組合員たちに週3回来ていただき、1点1点、その確認をしているところです。

動画はまだ4点しか公開していないのですが、今後どんどん追加していく予定です。1966年の水俣市内で開かれたメーデーの記録が組合事務所に8ミリフィルムで残されていて、音源と映像が別々だったのをシンクロさせる作業をして、本年公開しました。今日の参加者の中には子どものころに見た映像で懐かしく思われるかもしれませんが、若い方々にはこんな時代が日本にあったのかということになるかもしれません。会社と闘っていた労働組合ですが、メーデーには市長が挨拶にたち、自民党ですが市議会議長や、県会議員も挨拶に来ています。この労働組合が水俣病患者の支援に立ち上がっていくのです。今の水俣だけを見てみると、あるいは今の日本を見てみると、こういう時代というのがまず分からないのですが、こういう時代の積み重ねをきちんと残していけるのが資料の大事さだと思っています。

過去と現在をつなぐ。そのことから将来が見えてくるという重さを紙の資料は持っていると思いますが、ありがたいことにこういう映像資料が残っているので、直感的にも分かるのではないかとと思っています。

このような資料をどこで見られるかということですが、水俣市の二階建ての建物を借り、水俣学現地研究センターをおいています。来ていただいた方には資料閲覧コーナーを置いて、どなたでも

利用できます。

小さい建物ですが、一階は受付もなく、すべてオープンでフラットにしています。ここに「新日本窒素労働組合旧蔵資料」をおいております。本来的に言えば熊本市内の本学キャンパスに移したほうが管理も楽なんですけれども、私たちは現地に置くこととしました。資料はなるべく現場の近くにおいておきたいと思いますし、また利用する方々には、水俣まで足を運んでほしい考えもあります。

この労働組合は組合員がいちばん多い戦争直後で5,000人、分裂前は3,000人ぐらいいたのですが、一人ひとりの家計調査をしています。それから、給与票なども全部出させて取っているのです。それは個人名であり、組合から脱落した人たちの資料がある。また、この組合は水俣病患者の支援をしていましたので、患者さんの個人資料もたくさんあります。それらは貴重書庫におき、閲覧の制限をしています。そういうのをここに置いておきます。



組合事務所の物品

それから、組合事務所の解体に伴い、資料とともに物品もたくさん移ってきました。組合事務所にあった書棚もあるのですが、じつはこれには歴史的な意味があります。市販のものを購入したのではなく、チッソの会社の中で作られたものです。この会社は、機械類も自社内で製作していたのですが、このような机、棚類も自社で作っていたのであります。荒畑寒村が1970年代に水俣に来ていますが、そのとき座った椅子というのもあったのですが（笑）、誰かが持っていってしまいました。

一階の閲覧コーナーとは別に、長期滞在の利用者には、研究コーナー等々を使えるようにしています。研究センターとしては、こうした資料をデータベースの目録で見ていただいて現地に来ていただく。あるいは特定できればコピーしてお送りすることもしています。しかし、それだけではなく、組合の機関紙『さいれん』、全24巻を復刻（柏書房刊）したり、法政大学の大原社会問題研究所に協力いただいて組合資料展をしたり、刊行物を出したりしながら、一方で調査研究活動を日常的に続けています。それと同時に、現地調査や資料に基づいた研究と、資料収集と公開を対にして進めています。そのことでさまざまな資料が出てきます。

なぜこんなことをしているのか。さまざまな資料館や公的な研究機関や国立の熊本大学がやってくれるのであれば、私どものような小さな私学がすることははないと思うのですが、私たち自身が現地に足を置いており地域に密着して研究を進めています。熊本の地元にはこのような取組みをする大学や研究機関はありませんので、私たちがやるしかないと思っております。水俣にいますと、水俣病に関して、いろいろな人が調査、研究のために訪れてきます。

ところが、そうした研究者の多く、とりわけ若い人は、資料を1個探すのに何ヶ月もかけるという苦勞をしてくれませので、私どもで「ここにこれだけの資料があるから、それを見てからおいでください」というようにしています。

少なくとも社会科学の分野できちんとした研究を残すというのであれば、もちろんいま人に話を聞くのは大事ですが、過去の資料を踏まえた研究をしてもらいたいと思いますし、それだけの資料蒐集と整備をしていきたいと思っています。そうしないと、今の資料は過去の資料と現在の資料ですが、100年後に生き残る研究はないのではないかと思います。

最後です。話がバラバラで誠に申し訳ありません。私たちがこれからしていきたいことを1点だけ申し上げます。私たちは「水俣学アーカイブの構築」と呼んでおります。これは何かというと、ご存じの方も多いかと思いますが、ヒロシマあるいはナガサキという原爆の被爆地のアーカイブ、いま福島や東日本大震災アーカイブなどが始まっており、各地にアーカイブがつくられている。それを念頭に置き、水俣病の起きた不知火海沿岸の地図にデータを落としていきたい。それぞれ患者さんが住んでいた漁村、そこで患者さんの語りが出てくる、あるいは漁業の様子、住民や労働者のかたまりをそれぞれの場所にプロットして、それに関連した資料もそこから飛べるようにする。このようなアーカイブを構築していきたい。

私どもには材料はたくさんあります。さらに、いま患者さんの家を訪問して聞き取りを行い、5分から10分程度に映像、録音を編集しているところです。水俣病の起きたあの南北40キロ、東西20キロの海岸を含めた地図の上に、水俣の過去と現在を映していけるようなものをつくってみたいと思っています。

最後に、このような資料の収集と公開にはやはりかなりの資金が必要です。資金調達はセンター長の私の仕事ですが、これまでは、公的な機関であれば本当は5,000万かけるかも知れないところを500万しかかけられないという状況の中で、工夫しながら活動を続けてきました。こうしたことを継続的にしていくためにもどのようにしたらいいかと考えています。後のディスカッションの時間等々で補足をさせていただきたいと思います。散漫な話で申し訳ありませんでした。これで終わりにします。(拍手)